

『太平広記』鬼部説話の構成——鬼三十六〜鬼四十一——

The ghost stories of “Taiping Guangji” vol.36 ~ vol.40

三田 明弘
MITTA Akhiro

はじめに

本稿は、唐代までの中国鬼話の集大成である『太平広記』鬼部説話四十巻のうち、巻三五―「鬼 三十六」から巻三五五―「鬼 四十」までの鬼話の特徴を分析しつつ、晩唐期の鬼話の特徴を解き明かすことを目指したものであり、論者の既発表論文「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼一〜鬼十」^①、「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼十一〜鬼十五」^②、「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼十六〜鬼二十」^③、「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼二十一〜鬼二十五」^④、「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼二十六〜鬼三十一」^⑤、「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼三十一〜鬼三十五」^⑥の続編である。

右の六本の論文において、巻三一六―「鬼 一」から巻三五〇―「鬼 三十五」までの説話を分析し、鬼話の代表的な話型パターンを7種類に大別した。以下にそれを掲げる。

①冥婚譚 男が女の鬼と結婚するパターンが多く、女と男の鬼の例は少

ない。跡継ぎの子を産む場合も有るが、夫婦は長く共に暮らすことはない。

②塚墓宿泊譚 一夜の宿を借りた家が、翌朝起きて見ると墓であったという話。冥婚譚にもよく見られる話型である。

③変鬼帰還譚 鬼となった家族や友人が帰ってくる話。死後の自分の身分・境遇、鬼ゆえに知り得る現世の人々の未来、冥界の秘密などを鬼が語る。仏教の影響が強まるにつれて追福を求めるパターンも増えてくる。再婚した配偶者への憎悪から鬼が出現し、かつての妻や夫に危害を加える例も多い。

④冥界召喚譚 冥府の吏である鬼が人を冥途に召喚する。命に従い冥途に赴く話もあるが、賄賂や身代わりなどの手段で死を免れようとする話が多い。

⑤鬼神遭遇譚 外や自宅（廁の例も多い）などで鬼に遭遇するという話型。逃げたり争ったりする展開の場合は、その場で取り殺されなくても、間もなく絶命する話が多い。鬼神に改葬や廟の修復を依頼されるとい

パターンも少なくない。

⑥凶宅鬧鬼譚 家に鬼が居ついて、住人や宿泊者を悩ませるといふ話型である。初期の鬼話にも多くのパリエーションが見られる。その家の元の持ち主であったり、外から来たり鬼の出自も様々であるが、振る舞いも騒霊現象程度から人の命を奪うものまで多岐にわたる。食を盗む、食を求めるという要素が多くの話に見られる。例は多くないが、住人を助ける鬼の話もある。

⑦冥事占判譚 人の運命(冥事)を知ることが出来るということが鬼の大きな特徴の一つであるが、優れた道士なども鬼と同じように冥事の情報にアクセスできる。そのような人や鬼が、人の運命に関する情報を知り、予言したり運命を操作したりする話。

本稿では卷三五「鬼 三十六」から卷三五五「鬼 四十」までの全話の標題と談刻本『太平広記』に記す典拠、説話内容の概略を掲げ、²⁾ それらを右に掲げた話型一覽に基づき、話型毎に分類した上で分析を行う。

一 乱世の兆し—卷三五—「鬼 三十六」—

(唐宣宗・大中年間—僖宗・乾符年間)

邢群(『宣室志』) 大中二年(848)、もと歙州(安徽省)刺史、邢部員外の邢群は洛陽で重病の床にあった。親友の御史の朱瑄が見舞いに来て、すぐに治ると言って去った。実は朱瑄は病没しており、その死亡したのはまさに邢群を訪問していた時であった。

李重(『宣室志』) 大中五年(851)、検校郎中・知塩鉄河陰院事であった李重は退職し、河東郡(山西省)で病床にあった。ある夕、親友

の河西令の蔡行己が見舞いに来たが、しばらくするとその姿は別人へと変わっていった。蔡は連れてきた末弟に木製の小猿を使った易占をさせ、「病氣のことは心配ないが、酒を飲まないように」と忠告して去ったが、李重は回復すると以前のように酒を飲み、その年、杭州司馬に左遷された。

王坤(『宣室志』) 大中四年(850)春、国子博士の王坤は、数年前に死んだ婢の軽雲が会いに来る夢を見た。王坤は軽雲に夜の街に連れ出され、空腹を感じて下役の家に行くと、下役やその家族には王坤たちの姿が見えず、外からやって来た霊として祀られて食事が供えられた。それから郊外の軽雲の墓に入ったところで目が覚めた。王坤は嫌な夢を見たと思つたが、下役に確認すると実際に起きた事であった。その年の冬、王坤は死んだ。

蘇太玄(『桂林風土記』) 陽朔(広西チワン族自治区桂林市)の農夫蘇太玄の妻の徐氏は三人の子を産んで死んだが、「まだ寿命が尽きておらず冥府の帳簿に名がなかった」と帰ってきた。声のみで姿は見えなかったが、子供のために繯い物をしたり、近隣の人々を占って吉凶を告げたりした。人が占いの報酬を誤魔化そうとするのも見破つた。帝舜の蛮族討伐軍のために食事を作るのに駆り出されて家を空け、人の世の物より美味い食べ物を持つて帰ることもあった。ある時、冥界の事を人に話したために冥府に追われる身となったことを泣きながら告げて、いなくなった。

房千里(『投荒雜録』) 春州(広東省)南門外の仙署館にある盧公亭に左遷された房千里が滞在した時、その下僕のもとに魁偉な朱衣の者が現れる怪異が起きた。また、下級役人が東の部屋に泊まった時は、昼間にみすばらしい男が現れ、さっさと立ち退くよう言われた。牙門將の陸建

宗の話では、下級役人が見た男は、元和（806～820）に李師道が誅された時、この地で処刑された従事の陸行儉であったらしい。

韋氏子（『唐闕史』） 京兆の韋氏の息子が側室とした洛陽の妓女は、杜甫詩集の写本の誤りを正すことも出来る才女であったが、年二十一で死んでしまった。韋は悲しみて寝込んでしまい、嵩山の任処士に反魂の術を行って貰った。近づいたり泣いたりしなければ、蠟燭が一寸燃える間、靈魂は留まっているとの事であった。香を焚いた部屋に幕を廻らし、夕刻、任処士が長嘆して招くと幕の向こうに女が現れた。生前と変わらぬ様子であったが、話しかけても頷くのみであった。時間になり、近寄ろうとしたが女は消えてしまった。任処士は同情したにすぎないと謝礼を受け取らず、思いを断つよう韋に忠告したが、韋は悲しみから逃れられず翌年に死んだ。

李潯（『劇談録』） 咸通中（860～874）、中牟（河南省）尉の李潯は強気で神の存在を信じず、人が地面に酒を撒いて神を祀ろうとすると怒って止めさせた。ある時、李潯が病気になるまで寝ていると、数名のひどく醜い者たちが見舞いに来て、「お前はいつも人が我々に酒をふるまおうとするのを惜しんでいるが、今日はお前を酔わせてやろう」と言って、ぐでんぐでんになるまで李に酒を飲ませた。ひどい二日酔いになり、数ヶ月してようやく治った。

段成式（『南楚新聞』） 相国の段文昌の子の太常卿段成式は咸通四年（863）六月に死んだ。その年の十一月十三日、大雪の冬至の日に、親交の深かった温庭筠は、段成式からの手紙を受け取った。文意のよく分からない手紙であったが、温庭筠にそれぞれ伝わっている。沂王の守り役であった段安節は成式の子で温庭筠の婿でもあり、この話を語った。

鬼葬（『沿聞記』） 辰州（湖南省懷化市）激浦県の西四十里に鬼葬山がある。黄閔『沈川記』によると、その山中の岩壁に十余丈の木棺が有り「鬼葬の跡」と呼ばれている。故老の話では、鬼がこの棺を作った時、七日間、昼も暗くなり、斧と鑿の音だけが響いた。家々ではいつの間にか斧などがなくなっていたが、七日経って晴れるとなくなった物も戻ってきた。ただ戻ってきた鍋や斧は脂まみれで生臭かったとのことだった。

董漢勛（『三水小牘』） 汝墳（河南省葉県）の董漢勛は騎射に優れ、西北では羌族にも畏れられていた。乾符丙申の年（876）、董は龍興鎮（河南省平頂山市宝豊県）の将であった。ある日、妻に十人余りの酒食を用意させ、正装で空に向かって拝し、人と談笑するような様子で広間に入った。酒食はまるでお供えのようであり、妻が詰ると「辺境で陣没した仲間たちが久しぶりに会いに来てくれたのだ」と言った。翌年秋に土賊王仙芝の軍数万が郡を襲い、迎撃した精銳五百人はみな捕まり、唯一逃げのびた董は城内五百人の兵力で籠城し多くの敵を討ったが、飢え疲れて殺された。その奮戦の様子は賊将も感嘆するものであった。

卷三五「鬼 三十六」は、宣宗の大中年間から僖宗の乾符年間を時代背景とする鬼話が集められている。比較的安定していた宣宗の治世は「大中の治」と呼ばれており、宣宗自身も「小太宗」と称されているが、跡を継いだ長男の懿宗は暗愚であったと評されている。そして、懿宗の子の僖宗の時代から唐は滅亡期に入る。本巻の最後の「董漢勛」は王仙芝の軍が郡城を屠った話であるが、塩の闇商人であった王仙芝は乾符元年（874）に反乱を起こし、その配下にいたのが黄巢であり、唐を滅亡に導く黄巢の乱が始まったのである。

変鬼婦還譚

「邢群」「李重」はどちらも鬼の見舞いを受け、平癒が予言される話である。鬼と会って話が出来たのは、重篤な病のために自身が死に近い存在になっていたゆえであろう。

「王坤」は、鬼の視点から人の世を見るといって、通常の鬼話を裏返した構造の話である。

「蘇太玄」において、妻の声しか聞こえないのは蘇太玄が死から遠い健康体であったためであろう。民間の流行神が発生する構造を示唆する話でもある。

「韋氏子」は、唐代の降霊術の具体的な記録としても貴重な作品である。

「段成式」は、鬼となった友人が手紙を寄越す話なので、変鬼婦還譚の派生型とする。沂王は昭宗の第四子李禔のことであり、乾寧元年(894)に沂王に封じられたが、朱全忠によって天祐二年(905)に他の王と共に殺された。

「董漢勛」において、董に戦友たちが見えたのは、董自身の死が翌年に迫っていたためであろう。

鬼神遭遇譚

「李潯」は、無鬼論者を鬼が訪問するという話型の派生型である。

「鬼葬」は、山中の岸壁に設置した棒杭や岩穴に木棺を置く「懸棺葬」と呼ばれる中国古代の南方に見られる葬儀様式に関連すると思われる。

凶宅鬧鬼譚

「房千里」は、文人房千里に関する逸話としての側面をもっている。平盧節度使であった李師道は元和十三年(818)に反乱を起こして処刑された。

一 黄巢の乱の時代—卷三五一 鬼三十七—

(唐宣宗・大中年間—前蜀・天漢年間)

牟穎(『瀟湘録』) 洛陽の牟穎は、若い時に酔って郊外に出てしまい、夜中に目を覚ましたことがあった。傍らに夜露に濡れた骸骨があり、夜が明けてから埋葬してやった。すると夜になって二十歳ぐらいの剣を杖突いた白衣の者が穎を拝して、自分はほしいままに人を殺していた強盗であったが仲間と争って殺されたのだと語り、埋葬の恩を謝した。さらに、毎晩僅かの供え物で祀ってくれば、赤丁子と一声呼ばれた時に馳せ参じて穎のために働くと言った。それから穎はいつも赤丁子に盗みをさせて金持ちになった。ある時、穎は隣家の妻を見かけ、美人であったので赤丁子に連れて来させた。女は悲しんで泣き、隣家も役所に届けたので、数日後に家に帰らせ、「妖怪に攫われていた」と言わせた。それからは家人に気づかれないように数日おきに夜だけ来させて一年が過ぎた。女は穎の使う妖術について知りたがり、話してくれなければ事実を暴露すると迫ったので、穎は秘密を話した。女はその事を家人に告げ、隣家は道士に護符で家を守らせたが、女は黒雲に攫われ、牟穎は女を連れて失踪してしまった。

游氏子(『三水小牘』) 乾符(874—879)の初めの夏、許(河南省許昌市)の游氏の息子は勇猛を誇り、凶宅と怖れられ「住むことが出来た人に進呈する」と告知されていた旧趙將軍邸に乗り込んだ。果たして、夜が更けてくると紫衣の者たちが現れ、歌舞音楽に興じつつ宴会を始め、游氏の息子は捕まえようとしたが、足が押さえつけられたように動かず、声を出すことも出来なかった。夜明けを告げる太鼓が鳴ると怪異は消え、游氏の息子は屋敷から這い出て、しばらくしてからようやく

口がきけるようになった。以後、この屋敷に住んでみようとする者はなかった。

李雲（『聞奇録』） 先の南鄭県（陝西省漢中市）の尉であった李雲は、長安の貴人の娘である楚賓に求婚し、余人とは決して結婚しないことを誓って、ようやくその母の承諾を得た。数年後に楚賓は亡じ、一年後に李雲は先の南鄭県令沈氏の娘と再婚することになった。婚姻の日、李雲が風呂に入っていると、楚賓が現れ、結婚祝いと称して香料を湯に入れ、簪でかき混ぜて去って行った。李雲は不安を覚えたが、眠気と疲労感に襲われ風呂から出られなくなって死んだ。遺体は綿のようになり、骨も肉も溶けてしまった。

鄭総（『聞奇録』） 進士の鄭総は妾が病気になったので、科挙受験のための上京を取りやめようとしたが、妾にたしなめられて都に行った。春になり、落第して帰宅すると妾は既に死んでいた。葬って一月ほどして、深夜に妾がやってきたので、何か欲しいものがないか聞くと、良い茶を乞うたので、鄭総は自分で煮てやった。幼い娘にも会わせてやろうとしたが、「驚くだろうから」と会わずに去って行った。

王紹（『聞奇録』） 明経科の受験生の王紹は、深夜に読書をしていると、筆を借りたいと外から窓越しに頼まれた。貸してやると、「何人ぞ窓下に読書の声 南斗は闌干として北斗は横たはる 千里家を思へども帰るを得ず 春風に腸を断ず石頭の城」と窓に張った紙に記し、詠じ終るとあたりはしんと静まりかえり、誰もいなかった。それで相手は人ではなかったと分かった。

王鮪（『劇談録』） 鳳翔（陝西省宝鸡市）の少尹（副官）の王鮪は礼部侍郎王凝の叔父である。十四五歳の頃、果樹園の竹林の糞土に埋もれていた二個の髑髏を埋葬すると、感謝した霊が吉凶を予め知らせてくれる

ことを約束し、年月を経て霊と親しくなっていくた。交友の深い度支使（財務管理官）の崔珙の家での宴会に招かれた際、崔珙の歌妓が急死し、王鮪は白牛の頭と酒一斛を遺体を安置した浄室に準備させ、夜明けの太鼓が鳴ると牛が吠えるので、その時に急いで戸を開ければ蘇生すると教えた。崔珙がその通りにすると歌妓は生き返り、「夕方、華麗な屋敷での紫や朱の衣を着た青年たちの宴会に召し出されたが、牛頭の大男が靴を手に乱入し、自分を背負って出て、気がついたら部屋の中で寝ていた」と語った。後に崔珙はこの出来事について王鮪に尋ねたが、王鮪は答えなかった。

李戴仁（『北夢瑣言』） 川のほとりには俚鬼がよく現れて人の名を呼び、応えてしまった者は必ず溺死する。李戴仁が舟を枝江県の曲浦に係留していると、月明かりの下、老婆と男が水上に現れ、「人がいる」と驚き、水面を平地を行くように走り、岸に登って去って行った。また、当陽（湖北省当陽市）令の蘇洵が江陵（湖北省江陵县）で月明りの夜に着衣がびっしり濡れたざんばら髪的美女を見かけ、ふざけて「川の俚鬼じゃないか」と言うと、女は「幽霊と言ったな」と怒り、追いかけて来た。蘇洵は逃げ、夜警に出合って止まると、女は引き返して去った。

劉璩（『北夢瑣言』） 漢水の北、鄧州（河南省鄧州市）州境の穴口に、漢水に合流する川があったが、砂が溜まって流れが悪くなっていた。前の江陵（湖北省江陵县）令であった劉璩は、丙子の年（856 宣宗・大中十年）、穴口に行き、当地の韓氏から鄰村の張家の三日前に死んだ新妻が生き返った話を聞いた。新妻が言うには、廟神が将兵たちに川の砂を取り除く作業をさせており、張家の祖霊たちに彼らの軍糧を作らせていたが、餅を作る者がいなかったたので新妻が召喚されたのであった。村人たちは新妻の話を信じなかったが、久しからずして川の砂溜まりが

次々と碎けて水没した。

李矩(『北夢瑣言』) 成汭が荊州(湖北省・湖南省)を治めていた時期のこと。墊江県(重慶市墊江県)令の崔令と主簿の李矩は仲が悪く、崔令が群盗に殺された際、李矩は内通を疑われ、豫州(河南省)、ついで江陵(湖北省江陵県)に送られた。獄吏の常某は判官の范某が許さなかったにもかかわらず李矩を拷問し、むりやり罪を認めさせた。処刑に臨み、李矩は冥府で冤罪を訴えられるように家人に紙や筆を多く焼かせた。一ヶ月後、常某が急死し、范某の前に李矩が現れて、范某のことは恨んでいないが証人として冥府に来て貰う必要があると言った。范の妻子も懸命に頼み、范は一ヶ月の猶予を貰い、家の後始末をして翌月に死亡した。

陶福(『北夢瑣言』) 蜀將の陶福は若い時は無頼漢で犬や牛を盗んで食ったりしていたが、後に功を立てて郡守となり、興元府(陝西省漢中市)に属する西県(甘肅省隴南市)に駐屯していた。急病を發し、従者の朱軍將に医者^二の李令諱を興元府まで呼びに行かせた。李令諱と朱軍將は騎馬で西県に向かい、夜になって城外の諸葛亮廟の前まで来ると、囚人として陶福が徒歩で護送されるのに遭遇した。後ろからついてくる人々の中には、衣服を抱えた陶の老父もいた。恐怖と疑惑の中で明け方に軍營に至ると、陶の死を示す家族の哭声が聞こえてきた。先に見たのは、陶の靈魂が冥府に捕らわれていたのであった。

巴川崔令(『録異記』) 合州巴川県(重慶市)は乱で政庁が破壊され、要塞に移転して防衛を固めた。県令の崔某は要塞の木材を盗んだ兵卒を処刑したが、その兵卒の家では山神を祀っており、崔某は、家の金銭や物品がなくなったり壊されたりするなど、山神の嫌がらせを受けるようになった。方術でも祓うことが出来ず、崔某が退職して遠方に帰郷して

からも神は離れず、人のように飲食するのであった。崔某は一家を挙げて神をもてなしたが、その費えは大きな負担であった。ある日、大王を称する神が大鳥の羽ばたきの音と共に訪れ、山神を追い払ったことを告げ、代わりに住むようになった。神は張という姓で、崔某とよく話をし、家の者が楽器を演奏する時は合わせて歌ったり、詩を朗誦する時には間違いを訂正したりした。また、善行を行い、練氣の術を学び、修道することを勧め、自身は鶴に乗って天上と行き来していると言った。張は人のように飲食し、その娘や妻妾もおり、やはり費えは少なくなかった。善人や君子とは話をして粗暴な者は相手にせず、人の善悪禍福を言い当てたが、どういう神なのかは分からなかった。

馮生(『北夢瑣言』) 遂寧(四川省遂寧市)の馮生は鬼を見ることが出来、また人の吉凶が分かった。潁川(河南省禹州市)の陳絢が武信軍(王建的創設した藩鎮)の留後(節度使代理)を劉知俊に取って代わられた後、馮生は陳絢に「劉知俊は將帥であるのに、その靈体に旗や武器が見えない、長くないだろうから嘆くことはない」と言った。それから年を越さないうちに劉知俊は殺された。また、閩(福建省)人の林泳は、見鬼人が存在することを信じないと言っていたが、馮生が皆の前で林泳が嘗て女を殺害したことを暴き、その女が祟っていると指摘すると、林は恥じて女の靈に詫げることを約束した。

卷三五二「鬼 三十七」の説話は、乾符元年(874)に起きた黄巢の乱の時期が主な時代背景となっている。黄巢の乱は全国に波及し、各地の軍閥の動きも活発になってくる。乾符はまさに終わりの始まりの時代であった。そのような時代相を反映して、この巻から軍閥や悪事、正体不明の地方神の話が増えてくる。

冥界召喚譚

「劉琰」は、鬼卒による治水工事の後方支援のために、一時的に死者の世界に呼び出召し出される話である。農村における神や祖霊のイメージがよく分かる説話である。

「李矩」の冒頭に名の見える成柄は、昭宗の文徳元年（888）に反乱軍から荊州を奪回し、荊南節度使となった。

「陶福」は文脈としては、陶福が罪人となったのは若い時の犬や牛の殺生のためであるように書かれている。

変鬼婦還譚

「李雲」は、幽霊が葉で人を溶かすという点に特色がある。

「鄭総」は「李雲」と連続して排列されていることにより、悪妻と良妻のコントラストを成している。

鬼神遭遇譚

「牟穎」は、遺骨を弔ってやったことによって幽霊を使役できるようになる幽霊の報恩譚の話型に含まれるが、人間が幽霊を徹底的に悪事に利用する点に特色がある。

「王紹」で幽霊が詩に詠んだ石頭城は、今日の南京市の異称。本話の詩は南京で客死した鬼の望郷の念を詠んだものであるが、客死の理由は不明である。

「王鮪」は遺骨を弔ってやったことによって幽霊を使役できるようになる点で「牟穎」と共通している。王鮪の甥の王凝は、乾符五年に黄巢の乱で宣城（安徽省宣城市）が攻められた時に、城市を守り切った人物であり、本話も間接的に黄巢の乱に関連しているのである。

「李戴仁」では、「俛鬼」は人を溺死させる幽霊となっていて、虎に殺されて虎に使役されるようになった霊鬼を指す一般的な「俛」とは意味

が異なっている。

凶宅鬧鬼譚

「游氏子」は幽霊が直接人に危害を加えるのではなく、人を無視して宴会を行うパターンである。このパターンでは、人が乱入すると逃げてゆく場合が多いが、本話では幽霊の力が人を圧倒している。

「巴川崔令」は粗野な山の神をより洗練された神が追い出し、取って代わる構図である。酒食の供物を得るために、神は人を脅したり、友好的にふるまったりするのである。

冥事占判譚

「馮生」で語られる劉知俊の死は天漢元年十二月（918年1月）。前蜀の皇帝となった王建に疎まれ、謀反の罪を着せられて処刑された。

三 唐朝の滅亡―卷三五三 鬼三十八―

（唐僖宗・光啓年間～五代・後唐）

皇甫枚（『三水小牘』） 光啓中（885～888）、僖宗は梁州（陝西・四川・雲南省）にいた。秋九月、皇甫枚と裴宜城は帝が腰を据えられる地を求めて出発し、十月には相州（河南省）から西に向かい、高平県（山西省）に至り、坂の上で日が暮れ、道に迷った。坂の下の茅屋の村婦に声をかけたが返事がなく、下りてみると家は何年も放置されたもので誰もいなかった。再び坂を上り、出会った郵吏とともに端氏県（山西省）に行つて宿泊した。

陳璠（『三水小牘』） 沛中の兵卒であった陳璠は、後に徐泗節度使となる時浦と若い時に義兄弟のよしみを結んだ。黄巢の乱の際、時浦は支隊の命で討伐軍五千人を率い、陳璠を副将としたが、陳璠が反乱を起こし、

時浦も同調して平陰(山東省)を屠り、沛に至って支辟から兵権を奪った。さらに陳璠は時浦が反対するにも関わらず、人望の高かった支辟を謀殺した。時浦は朝廷から節度使に任命され、陳璠を宿州(安徽省)太守にしたが、陳璠は苛政の限りを尽くし、張友と交替させようとしても従わなかったので、張友に討たせた。処刑される際、陳璠は「積玉堆金、官又崇し。禍来たりて倏忽として変じて空と成る。五年の栄貴、今何くにか在る。南柯一夢の中に異ならず。」という詩を賦したが、読み書きの出来ない男であったので、時人は鬼の代作であると思った。

豫章中官(『稽神録』) 天復甲子の年(904)、豫章(江西省)の住人は、毎晩、市に向かつて数十人が移動する声を聞いたが、見れば誰もいないので、恐怖で眠ることも出来なかった。やがて宦官誅殺の詔があり、豫章でも五十人が市に追い立てて殺された。その喧噪は、先に聞いた声と同じであった。

邵元休(『玉堂閒話』) 南漢(917~971)の左司員外郎となった邵元休は、唐の天復年中(901~904)にはまだ元服前で兗州(山東省)で暮らしていた。ある夜、婦人の靴音がして何者かが邵元休の部屋に近づいてきた。途中で磁器の割れる音がして、入ってきたのは青黒い布で顔を隠した六七尺の者であった。邵元休は懼れずに怒鳴りつけて誰何したが、答えず去って行った。夜が明けてから見ると南の部屋の茶卓に置いてあった白磁が地面に落ちて割れていた。その屋敷は嘗ては兵馬留後の家で、留後の死んだ娘がとても背が高かったそうなので、おそらくはその女の魄だったのである。

何四郎(『玉堂閒話』) 後梁(907~923)の時代、西京(洛陽)中州の市で化粧品を売っていた何四郎は、毎朝、夜明けの太鼓が鳴る前に遠くから名を呼ばれるという事が続き、半月後の朝、店を開けると「官

のお召しである」と下僕らしき者に強引に外に連れ出された。相手は鬼ではないかと疑い、靴で自分の周りに線を引いて囲めば邪魅を防げると聞いていたものの、靴は出る時に脱がされ、家に投げ込まれていた。北の徽安門を出て、日暮れに将相だった人の館だという朱塗りの門の豪邸に到着して接待され、その家の娘の婿になるよう乞われた。娘の美しさに心を奪われ、明け方、気がつけば塚で寝ていた。帰ろうとして荒れ果てた井戸に落ち、また一晩過ぎてから樵に発見されて家に知らせて貰い、救出された。数日を経てようやく回復した。

青州客(『稽神録』) 後梁の時代、青州の商人が海で風に流され、鬼国に漂着した。鬼国の景色や器物は中国とあまり変わらなかったが、その地の人々には商人の姿は見えないようであった。王宮に入って王に近くと王は病になり、巫師が「たまたまやって来た人の陽気にてられたせいなので、食事と飲み物、車馬を用意して去って貰えば良い」と言い、別室に酒食が設けられた。食べ終えると、御者付きの馬車があり、それに乗って岸に戻り、順風を得て帰国することが出来た。青州節度使の賀德儉は、魏博節度の楊師厚と親しかったので、この商人を魏への使者として楊師厚のもとに送り、詳しく話をさせた。魏人范宣古は直接この話を聞いており、私(『稽神録』の作者徐鉉)に語ったのである。

周元樞(『稽神録』) 睢陽の人、周元樞は平盧節度使(山東省)の掌書記となり、臨淄の官舎に住んでいたが、隋の開皇年間にその家に住んでいた鬼である李司空に立ち退きを要求された。冥府からそこに自分の廟を立てることを許可されたのであるという。しかし、周元樞も殺されても棺に紙と筆を多く入れさせて冥府で訴えると譲らず、両者は数百杯の酒を飲み交わしながら激しく論じ、李が去ろうとしても周は引き留めた。しばらくして召使いが「周書記のような頑固者と議論して苦しむことは

ない」という夫人からの伝言を李司空に述べ、李は暇乞いをして去り、周は門前まで見送った。その後、周には何事もなかった。

朱延寿（『稽神録』） 寿州（安徽省）の刺史朱延寿が入浴していると、窓外で、赤い髪に青い顔の書類を持った二人の青衣の者が、どちらも自分が取ってくるよう命を受けたと言いつ合っていた。朱延寿が従者を呼ぶと二人とも消え、やって来た従者らは外には誰もいないと言った。それからまもなく朱延寿は殺された。

秦進忠（『稽神録』） 天祐丙子の年（916）、浙西軍士の周交が造反し、大将秦進忠、張胤ら凡そ十余人を殺害した。秦進忠は、少し前から、若い時に心臓を刺して殺した奴隷が心臓を手を持って立っているのを見つても見えるようになっていた。それが百歩離れた場所から日ごと近づき、秦が殺された日には馬前におり、左右の者にも見えた。秦は胸を傷つけられて死んだ。張胤は一ヶ月ほど前からいつも自分の姓名を呼ぶ声ははっきり聞こえるようになっており、その声は日々近くなり、当日は目の前にいるかのようにであった。政庁で襲われ、殺されたのである。

望江李令（『稽神録』） 望江（安徽省安慶市）の李令は退職して舒州（安徽省安慶市）に住んでいた。李には二人の賢い息子がいた。ある時、酒を飲んで帰宅する途中、迎えに来た息子たちに道すがら殴られ続け、家の近くまで来ると息子たちは逃げていった。李が家に入ると内から息子たちが出てきて、外には出ていないと言った。一ヶ月後、李は知人宅で酒を飲み、その家に泊めて貰った。一方、父親を心配して迎えに出た息子たちは、道で父に会い、暮れ方に外に出たことを叱られ、従者に殴られた。翌日、帰宅した李はその話に驚いた。それから何ヶ月もしないうちに父子共々死んでしまった。当地の人々は、舒州の山鬼の得意なやり口だと話した。「黎邱丈人」の故事に見られる鬼の類いであろう。

張飛廟祝（『野人聞話』） 梓州（四川省綿陽市）の城外十余里に張飛廟があり、廟中の衛士の土偶が廟祝の妻を妊娠させた。髪が赤く顔も手足も土偶に似た娘が生まれ、成長すると皆畏れた。梓州で任官する者は皆この廟に詣でて、娘を見て銭や布を与えた。娘は今も健在である。

僧彦脩（『北夢瑣言』） 草書の名手の文英大師彦脩は、洛陽で後唐（923～936）の明宗の世子である秦王從栄に厚遇されていた。後に江陵の西湖にある曾口寺に移り、ある時、秦王が二十騎を従えて寺にやってきたが、声をかけるまもなく消えてしまうという事があった。それから十日も経たずに秦王は殺された。

建康樂人（『稽神録』） 建康（江蘇省南京市）の樂師が日暮れに市に行くと、二人の召使いに陸判官の邸宅に連れて行かれた。十人余りの客が酒を飲んでいたが食べ物はなく、樂師は酒も飲ませてもらえず、明け方に疲れて門の外で寝てしまった。起きると、そこは陸判官の塚墓であった。陸判官がいつ頃の人かは不明である。

黄廷讓（『稽神録』） 建康の役人の黄廷讓は酒を飲んで帰る夜道で頭がぼんやりし、体が浮き上がり、ふわふわと漂って無人の大邸宅に入り込み、その小部屋で寝てしまった。目が覚めると蔣山の前の草地であった。城壁を越えて堀に落ちていたのである。惚けて病気になってしまい、一年余りしてようやく治った。

張瑗（『稽神録』） 江南の宦官張瑗は、日暮れに建康の新橋を通り、衣服をただけさせた美女が狂奔するのを見かけた。女は旋風に変化して張瑗の方に向かってきて、張の乗っている馬を倒した。馬は負傷した片足を上げて戻り、傷が癒えてからも、この橋を通る時は片足を上げた。

婺源軍人妻（『稽神録』） 丁酉の年（937）に死んだ婺源（江西省上饶市）の建威軍の軍人の妻が、自分の子を虐待する後妻と、それを制止

できない夫の前に現れ、叱責した。夫婦は前妻のために酒食を設け、親類や近隣の者も集めた。みな、前妻と話をすることは出来たが、姿が見えるのは夫のみであった。ただ、夫にも同衾は許さなかった。十日が過ぎ、一族を挙げて墓まで見送った。前妻が墓地の植木の中に入っていた時、皆にも生前と変わらぬその姿が見えた。建威軍使の汪延昌が語った話である。

陳德遇（『稽神録』） 辛亥の年（951）、江南の王朝の右藏庫官であった陳居讓は字を德遇と云った。陳が倉庫に宿直した晩、その妻は二人の役人が「陳德遇」を探しに来る夢を見た。妻は自分の夫は字が德遇であるだけで姓名が陳德遇なのは別人であると教え、役人たちは「間違えるところだった」と言って去った。それから数日の内にその陳德遇は死んだ。

広陵史人（『稽神録』） 暑い夏の夜、広陵（江蘇省揚州市）の役人の趙が寝ていると、七人の黄色い服の小人を連れたやはり黄色い服を来た者が入ってきて、趙を起こしてどこかに連れて行こうとしたが、小人の一人が「寿命がまだ尽きていないからすぐに連れて行くことは出来ない。印だけつけよう。」と言い、趙の左臂に「仙」や「記」のように見える古い篆書の文字の印を押した。趙のその後は分からない。

「卷三三三 鬼三十八」は、唐の僖宗の光啓年間から唐末までと五代の後梁・後唐、そして南方の諸王朝に関する説話で構成されている。文徳元年（888）、僖宗が崩御して弟の昭宗が即位し、昭宗の時代に朝廷を牛耳る勢力が宦官集団から朱全忠へと交替する。「豫章中官」はその事を象徴する説話であるとも言える。天祐元年（904）、朱全忠は昭宗を暗殺して哀帝を即位させ、天祐四年（907）に哀帝から禪讓され

て後梁を建てた。こうして唐は滅亡した。

冥婚譚

「何四郎」は後梁（907～923）の話である。後梁は、首都開封が東都、洛陽が西都であった。

「張飛廟祝」は、何らかの異常性を認識された子供が「神の子」とされる現象の事例である。出典の『野人間話』は前蜀時代の出来事を集めた説話集。作者は宋の景煥で、乾徳三年（965）の自序がある。

塚墓宿泊譚

「建康樂人」「黄廷讓」は現在の南京市の話である。南京市は五代十国期には呉（902～937）及び呉の禪讓を受けた南唐（937～975）の都であった。

変鬼帰還譚

「僧彦脩」は後唐（923～936）の話である。第二代皇帝明宗（李嗣源）は名君として知られている。長興四年（933）、明宗が危篤の床にある中、既に崩御したと誤解した秦王李從栄はクーデタを起こして失敗し、斬殺された。本話で李從栄を世子とする理由は不明。

「婺源軍人妻」の建威軍は南唐に属する軍隊であり、本話は南唐の話である。

鬼神遭遇譚

「皇甫枚」は黄巢の乱後、軍閥間の抗争により李克用軍が長安に迫り、僖宗が都を脱出し、鳳翔府に逃げていた事を背景とする説話である。

「陳璠」の支辞・時浦は、支辞・時溥の誤りである。

「豫章中官」で述べられている宦官の大量誅殺は宰相崔胤と朱全忠によつて行われた。その時期は、天復甲子の年ではなく、前年の天復三年癸亥の年（903）の一月である。

「朱延寿」は朱延寿の死の前兆としての怪事を語っている。朱延寿は呉王楊行密への反乱を目論んでいたことが知られて、天復三年に楊行密におびき出されて殺された。

「秦進忠」は死期が近づくほど人が鬼に近い存在になり、崇っている鬼が対象に近づけるようになることを示しているのであろう。

「望江李令」話で言及される黎邱の鬼とは、『呂氏春秋』「慎行論 疑似」所収の類話に登場する鬼である。その話では父は息子を鬼と思いついで刺殺してしまう。「黎邱丈人」という成語になっている。

「張瑗」も南京市の話である。
冥界召喚譚

「青州客」は鬼国に行く話なのでここに分類した。『稽神録』の作者である徐鉉は『太平広記』の編纂にも加わっている。

「陳德遇」は原文では陳居讓の役職名の前に「偽」とあるので、『稽神録』の作者徐鉉の仕えていた南唐以外の国の話であろう。

「広陵吏人」は呉または南唐の話である。
凶宅鬧鬼譚

「邵元休」で白磁が割れていたことを強調するのは、それが確かに幽霊が通った証拠となるからである。

「周元樞」では人の強情さに幽霊の方が気圧されてしまっている。五代の鬼話は幽霊よりも人の方が凄まじい話が少なくない。

四 中心を失った世界―巻三五四 鬼三十九―

(唐僖宗・龍紀年間～五代・後梁)

楊城(『玉堂閒話』) 楊城は科擧に失敗し、秦寧軍節度使(山東省南部)

朱瑾の書記となっていた。兗州(山東省)龍興寺の法宝大師に、楊書記宅の土地神である白衣の翁が、楊書記が土地神を圧迫する建物の造営を続けることを訴えた。なぜ、楊を祟らないのかと尋ねると、運勢がまだ衰えていないのでどうしようもないと答えて消えた。数年後(896)、朱瑾は戦に敗れ、都市を放棄して逃げ、楊城は一家皆殺しとなった。

袁繼謙(『玉堂閒話』) 殿中少監の袁繼謙がかつて兗州(山東省)で病気の親の介護をしていた時に黒衣の人が来て、その名刺には「前の某州長史 許延年」「お悔やみ申し上げる」と記されていた。袁は不愉快に思いながら会いに出たが、もう去っていた。その年に親は死に、袁は名刺を紙銭とともに燃やした。

邠州士人(『玉堂閒話』) 後梁(907～923)の時代、ある士人が雍州(陝西省西安市)から邠州(陝西省咸陽市)に向かう途中、夜道で王者の風格のある騎馬の三人の男が、「命令により邠州で三千人を取らねばならぬが、戦争では君子も殺してしまうから疫病が良いだろう」と話しているのを聞いた。士人が邠州に着くと、本当に疫病が流行し多くの人が死んだ。

王商(『玉堂閒話』) 後梁の貞明甲戌の年(914)、徐州の将である王殷は反乱を目論んだ。その年の八月二十日の夜、青衣の鬼兵の部隊が騒がしく様々な音を立てながら徐州の庁舎から東門へ抜けていった。冬になって、王殷は朝命を拒み、劉鄩の討伐軍兵五万と八ヶ月に亘って戦つて敗れた。徐州全域が被害を受けた。

謝彦璋(『玉堂閒話』) 後梁の許州(河南省許昌市)節度使の謝彦璋が謀反の罪で殺され、朝廷が宣和庫副使の郝昌遇に許昌でその家財を整理させた時、一室にあった謝彦璋の肖像画の左目から鮮血が流れていた。謝彦璋は生前すっぱんを好み、河陽を治めていた時は漁師に毎日届けさ

せ、獲れない時は重く罰した。ある日の夜明け前、漁師がすっぽんを獲りに行こうとすると、ある人が今日は漁を止めてくれと頼んだ。漁師は行かないと罰せられると断ったが、その人が五千銭を払うと言うので承諾した。朝になって、漁師が確認してみると、もらった銭は紙であった。

崇聖寺(『玉堂閒話』) 寒食の日、漢州(四川省德陽市)の崇聖寺に朱衣と紫衣の二人の貴人が訪れ、壁に詩を書いた。朱衣の詩「禁煙の佳節、此に同遊す。正に値ふ、醪醢の岸を夾みて香るを。緬想す、十年前往の事。強ひて風景を吟じ、愁腸を乱す。」紫衣の詩「馬に策し暫し尋ぬ、原上の路。落花芳草尚ほ依然たり。家亡び国破るは一場の夢。惆悵す、又寒食の天に逢ふを。」書き終えりと馬で去って行つたが、一月余り残り香があつた。その詩は現存している。

任彦思(『幽明録』) 蜀の昌州(重慶市)の牧、任彦思の家に、哀切な音楽を奏でる一方、酒食を要求する鬼が住み着き、用意しないと人の耳に虫を入れるなどの嫌がらせをした。引越してもついて来て七八年に亘つて悩まされたが、突然何事も起きなくなり、屋根の梁に血で詩が書かれていた。「物類遷変し易く、我行くも人見ず。任彦思を珍重すれど、相ひ別れし日已に遠し。」任彦思は文字を削り取ろうとしたが、既に木に染み込んでいた。

張仁宝(『述異記』) 校書郎の張仁宝は才学があつたが夭折し、成都から閬中(四川省閬中市)に運ばれ、東津寺に殯された。張の家では寒食の日に芭蕉の葉に詩が書かれていた。「寒食、家家盡く煙を禁す。野菜、風に小花の鈿を墜す。如今空しく孤魂の夢みる有り。半ばは嘉陵に在りて半ばは錦川にあり。」また端午の日には身の長三丈の張が門に「五月午日、天中節」と書いた。本葬を行つてからは張の鬼は来なくなつた。

楊蘊中(『幽異記』) 進士の楊蘊中は成都の牢獄で、風采は上がらない

が言葉に優れた女を夢に見た。女は、自分は薛濤でこの部屋で亡くなつたと語り、蘊中に次の詩を贈つた。「玉漏深長にして燈耿耿たり。東牆西牆、時に影を見わす。月明の窓外、子規が啼き、忍ぶれど孤魂をして愁夜の永きを愁へしむ。」

王延鎬(『靈異記』) 梓州(四川省綿陽市)の陽関の神は蜀の車騎將軍西郷侯張飛であり、靈験あらたか州の人々に敬われていた。龍州軍判官の王延鎬は身受けした成都の妓女霞卿を陽関の神に召し上げられ、霞卿は死んだが、その後、神から解放されて鬼のまま再び王延鎬と暮らすようになった。自身の似顔絵を依り代として、飲食なども生きている人のようにあつたが、共に暮らすのは娘が嫁ぐまでと言つた。王が再婚してから黒い蝶となつて現れるようになり、霞卿の娘を嫁がせた後は声も聞こえなくなつた。

僧惠進(『録異記』) 西蜀の福感寺の僧惠進は、早朝、長身の青黒い者に追われ、民家に逃げ込んだが捕まつて名を聞かれた。答えると、姓が違つて言つて惠進を捨てて去つて行つた。その夕、惠進と同名異姓の者が死んだ。

田達誠(『稽神録』) 廬陵(江西省吉安市)の富商田達誠はよく人助けをした。ある時、水害で家が壊れてしまつた龍泉(浙江省麗水市)の鬼に乞われて、家に住まわせてやつた。鬼は詩や書に巧みで、名を聞くと「天然我と一霊を通じ、還た人間と事同じからず。吾が家の眞の姓字を識らんと要すれば、天地南頭一段紅なり。」と詩で答えたが、その意味は解けなかつた。また、鬼の息子と樟樹神の娘の婚礼のために後堂を三日間貸してやつた。それから一年余りで鬼は去つて行つたが、田が広陵(江蘇省揚州市)からなかなか帰らず、家族が心配した際は無事であること知らせてくれた。その後、田は龍泉の鬼の住まいを探したが見つから

なかった。

徐彦成（『稽神録』） 木材の買い付けが主な業務である軍の役人の徐彦成は、丁亥の年（927）に信州瀨口場（江西省上饒市鉛山県瀨口鎮瀨口村）で知り合った若者の豪邸に招かれ、良質の木を安く売ってもらえた上に、高く売れるからと大きな杉板を四枚贈呈された。秦准（南京市）に行くと、呉帥が逝去した折で、徐の杉板が立派で棺材にふさわしいと銭数十万で買い取られた。徐はそれから三回に亘って若者と取引をして巨利を得たが、一年ほど間を空けて訪ねると、村は元のままであったが若者の豪邸はなく、村人に聞いても若者を知っている者はいなかった。

鄭郊（『述異記』） 進士となったが科挙に落ちた河北の鄭郊は陳蔡の間（河南省）で二本の竹を植えた塚墓を見た。「塚上兩つの竿竹 風吹き常に裏裏とす」と吟じたが下の句を継げずにいると、塚の中から声がして「下に百年の人有り 長く眠りて暁を知らず」と続けた。

李茵（『北夢瑣言』） 進士の襄陽（湖北省）の李茵は、宮殿から流れてきた紅葉に「流水何ぞ太だ急なる。深宮尽日閑たり。殷勤に紅葉に謝せど、好みて去り人間に到る。」と宮女の詩が書かれているを見つけ、しまっておいた。後に僖宗が蜀に逃げた時、李茵は避難していた南山で、その詩を書いた宮中侍書の雲芳子と知り合い、共に蜀に向かったが、綿竹（四川省徳陽市）で宦官の田大人に見つかり、雲芳子は奪われてしまった。夕方に雲芳子は戻ってきて田に賄賂を払って見逃して貰ったと言った。共に襄陽に帰ったが、数年して李茵は靈氣に中てられて病気になる、雲芳子は実は綿竹で自縊し幽霊となって側にいたことを告白して去って行った。

柳鵬拳（『北夢瑣言』） 唐の龍紀年間（881）、士人の柳鵬拳は杭州の伍相廟で雨宿りをした時に銭大夫の召使いの五弦琴を抱えた女と深い

仲になり、船中に女を隠していたが、役人に見つかってしまい女は首を吊って死んだ。その後、女は柳の元に戻ってきて、柳も女が死んだことを知っていたが一緒に暮らした。随分時が経ってから女は去って行った。**周潔**（『稽神録』） 霍丘（安徽省六安市）の令であった周潔は、甲辰の年（884）、退職して淮河を旅した。大飢饉の時期で、営業している宿はほとんどなかった。煙の立っている村に行き、村娘とその妹が病気で動けない家族と住む家の広間に泊めて貰い、二人に餅をやった。朝になって人を呼んでも誰も答えず、姉妹が昨夜入った部屋を見ると、部屋中に死体が積んであり、その中に姉妹の遺体もあった。餅は胸の上に置かれており、周潔は皆を埋葬してやった。

「卷三五四 鬼三十九」は、唐の僖宗の龍紀年間の説話や五代後梁の説話に加えて、後半には蜀を中心に西方の地域の説話が集められている。前巻「卷三三三」の後半が江南を中心に主に南方の説話を中心に構成されていたのと併せて、この混沌とした時期の全体像がおぼろげながら浮かび上がるようになっていく。

塚墓宿泊譚

「周潔」は甲辰の年の出来事であるが、唐の僖宗の中和四年（884）が飢饉の年として記録されている甲辰の年となる。

「徐彦成」における若者は鬼で、豪邸はその墓と考えられるので、塚墓宿泊譚の派生型とした。丁亥の年の呉帥の死とは、呉の順義七年（927）の太師徐温の死のことである。後に徐温の養子の徐知誥（李昇）が呉の禪讓を受けて南唐を建国する。

変鬼帰還譚

「王延鎬」「李茵」「柳鵬拳」は、死んだ妻が幽霊となって帰ってきた

ために、やがては別れなくてはならないという共通した構造になっている。

「李茵」で語られる僖宗の蜀への逃亡は、広明元年（880）の黄巢軍による長安占領の際のことである。

「柳鵬拳」は唐の龍紀年間の出来事とあるが、龍紀が使用されたのは昭宗の治世の889年のみである。

「張仁宝」は鬼詩の詩話でもあるが、節供毎に現れる幽霊の姿に哀愁が感じられる。

冥界召喚譚

「僧惠進」は似た名前の人と間違われそうになる型の説話である。

「袁継謙」は死の予告に訪れる話なので、冥界召喚譚に分類した。

鬼神遭遇譚

「楊城」は、朱全忠に敗れた朱瑾が乾寧三年（896）に山東を放棄し、淮南節度使楊行密の元に身を寄せた史実をふまえている。

「邠州土人」は、戦争を無差別殺人とするのに対して、疫病については君子は罹患しないという見方を示している点が目される。

「王商」には貞明甲戌の年という表記があるが、甲戌の年の元号は乾化で、貞明となるのは翌年からである。また、王殷を王商としているのは、殷王朝を商とも呼称することに起因するものか。

「謝彦璋」は殺生を戒めるといふ仏教説話的要素を含む。

「崇聖寺」「鄭郊」は鬼詩の詩話である。「楊蘊中」は、その生涯を蜀の地で過ごした中唐の女流詩人の鬼詩話であるという点に、説話の重点が置かれている。

凶宅鬧鬼譚

「任彦思」は鬼詩の詩話でもある。

「田達誠」は、鬼が家に住みつく話なので、悪意的な鬼の話ではないが凶宅鬧鬼譚として分類する。

五 鬼の目に映った乱世の年月―巻三五五 鬼四十一―

（五代・後周）

楊副使（『稽神録』） 壬午の年、広陵（江蘇省揚州市）の瓜州の市で、「明日、楊副使が金山の役所にいらっしゃる」と言って慌てて果物を買求める人がいた。ちょうど揚州に向かう浙西副使がいたが、翌日、船が金山まで来ると頓死した。

僧珉楚（『稽神録』） 広陵法雲寺の僧の珉楚は、親しかった中山の商人章某の鬼と市場で出会った。章は生前の小さな悪事のために人の過剰な利益を掠め取る掠刺鬼として揚州に流されてきたのだった。昨今、自分のような者は多いと章は言って、やはり鬼であるという花屋の女から赤いきれいな花を買って珉楚にくれたが、たいへん重かった。この花を見て笑う者はみな鬼だと章は言った。珉楚は寺の前で花を捨て、後で改めて見に行くと、それは死人の腕であった。

陳守規（『稽神録』） 將軍の陳守規は信州（江西省上饒市）に流罪になり、凶宅と言われている公館で鬼と戦い、その鬼と共に暮らすことになった。鬼は吉凶などを予め知らせてくれ、陳は鬼に食べ物を売ってやることもあったが、嫌になったので方士に天帝に訴えさせた。鬼は陳を罵ったが、蜀に行くと言っていないなくなった。

広陵賈人（『稽神録』） 広陵の商人が錢二十万をかけて作らせた栢木の什器の名品百余点を舟に乗せて建康（南京市）に売りに行つたが、風を避けて瓜歩の山の下に停船した際、天候が荒れて避難している内に傍ら

に停泊した三人の漕ぎ手しかいない不審な大舟に什器を全て盗まれてしまった。弁償するから恨まないようにと言いつつ残して大舟は去って見えなくなり、商人が広陵に帰ると、荷物を盗まれた翌日に何者かが家に銭三十万を届けていた。

浦城人（『稽神録』） 浦城（福建省南平市）の人が死んだ際に金一斤を残したことを妻が姑に告げずに隠していたところ、翌年、夫の鬼が帰ってきて妻を殺そうとした。母が自分に容疑がかかってしまうと止めたので、夫は自ら送って妻を実家に返した。

劉道士（『稽神録』） 廬山（江西省）の劉道士は南岳衡山（湖南省）への旅の途中、宜春（江西省宜春市）の貧しい家に宿を借りた。その家は殯も出来ずに死んだ息子の遺体を置いていたが、夜になって顔の白い男が「残念だ、残念だ」と慟哭しながら入ってきて、遺体を背負って去って行った。

清源都將（『稽神録』） 清源（福建省莆田市）の都將楊某の家に白髭の翁の鬼が入り込んだ。動きが素早く杖で打つことも出来ず、巫女にも抑えられなかった。二人の娘は台所で料理をしている時に驚かされて病気になるてしまい、やがて妻も娘たちも死んでしまった。明教という魔法の使い手が来ると、罵りながら去って行ったが、楊もその年の内に死んでしまった。

王訓妻（『稽神録』） 南安県大盈村（福建省泉州南安市）の王訓と妻の林氏は、林氏に取り憑いた陳九娘の霊が、自分を香花で祀ってくれば利をもたらすというので受け入れ、九娘は林氏を姉と呼んだ。九娘の説く吉凶はよく当たり、依頼があれば遠近を問わず林氏と出かけ、祭祀の仕事も立派に執り行った。その姿形も、半年ほどで腰から下は親しい人々には見えるようになってきた。二年間で巨利を得るに至ったが、あ

る日、九娘は泣きながら林氏に別れを告げた。九娘は前世において林氏の銭二十万を隠匿し、その罪を償うために鬼として遣わされたが、償いが終わったので男子に転生するとの事であった。別れの酒宴では九娘の全身が見えるようになっていた。泣きながら「お元気で」と言い、去って行った。

林昌業（『稽神録』） 漳浦（福建省漳州市）の林昌業は泉州軍事衛であったが、七十で隠居し、龍溪県（漳州市）羊額山で道術の研究をしていた。良い田を持っており、米を脱穀して都市で売りたいと思っていたが人手が足りなかった。ある日、三十歳くらいの髭面の男がやって来て、何を聞いても微笑むだけで答えず、林は鬼だと察したが満腹するまで飯を食わせてやった。翌日から一カ月かけて鬼は五十石の米を脱穀してくれた。ごちそうを出してやっても野菜と飯しか食わず、やはり一言も話さずに去って、以降はもう現れなかった。

潘襲（『稽神録』） 建安（福建省建甌市）の県令潘襲の命を受けて犯人逮捕に向かった役人が道に迷って泊めて貰った家は、引越しの準備で奥方が朝まで忙しく立ち働いていた。明け方に辞去してから書類を忘れたことに気づいてその家に戻ると、そこは塚でまさに改葬するところであった。書類は棺の中にあつた。

胡澄（『稽神録』） 池陽（陝西省咸陽市涇陽県）の胡澄は小作農であった。妻が死んだ時、役所から棺が支給され、中に普段身につけていた装飾品等も入れた。数年後、市で妻の棺に入れた首飾りが売られており、それを売ったのは妻自身であった。冥司から棺の代金を催促されて、首飾り売ったのであった。胡澄は出家して僧となった。

王攀（『稽神録』） 高郵県（江蘇省揚州市）の医師王攀は広陵（江蘇省揚州市）から高郵県に小舟で行こうと思つたが、親友と酒を飲んで大酔

して間違った方へ行き、見知らぬ家に入り込んで寝てしまった。その家の奥方に事情を話すと、村童を呼んで広陵の城東まで王攀を送らせた。難路を村童に助けられて城東に到着できた王攀は固辞する村童に上着を与えたが、別れた後にその上着が自分の帯に挟んであるので、昨夜の家に戻ってみると、そこは古塚であった。

鄭守澄〔稽神録〕 広陵副将の鄭守澄は新たに婢を買い入れたが、夜、何者かが門を叩いて「その婢の名は私の方に登録されているから、手元に置いてはいけない」と言った。数日後、広陵に疫病が蔓延し、婢は罹患して死んだ。鄭守澄も死に、甲間に来た者たちも死んだ。甲寅の年（954）の春のことである。

劉騰〔稽神録〕 洪州高安（江西省高安市）の劉騰は若い時に戦乱に遭い、姉の糞掃は將軍孫金に奪われ、妹の烏頭は十七で死んだ。三年後、孫金が常州（蘇蘇省常州市）の団練副使となり、糞掃は、そこで任という軍人の妻になっていた烏頭に再会した。烏頭は攫われて岳州（湖南省岳陽市）に連れて行かれ、劉翁夫婦の養女になって任と結婚したのだと話した。更に数年後、高安県の下級役人になっていた劉騰も烏頭と再会した。任は烏頭の針仕事に誰かが手伝っているかのように早いことや冷えた物しか食べないことなどを語った。劉騰がお前は死んだはずだと密かに烏頭に尋ねると、それは聞かないで欲しいと言った。その後、任は死亡し、烏頭は羅という江州（江西省九江市）の軍人と再婚した。高安の制置の陳承昭が劉騰を召し出して話を聞き、烏頭の墓を調査させた。墓所は放置されたまま数十年経っており、木を伐って道を作り、墓の上に出るとお椀ほどの穴が空いていたが、深さは測れないほどで、皆恐れて墓を発掘することは出来ず、大樹の下に退却して報告書を作った。その年、烏頭は「武器を持った十数人の男に襲われたが、抵抗すると大樹の下に逃げて文書

を作って去って行った。」と話したので、劉騰は烏頭が墓に出入りしていることを知り、懼れて疎遠になった。その後、烏頭の夫の羅は晋王に臣従した。顕徳五年（958）、後周が淮南を手に入れた。羅は陣没し、時に六十二歳になっていた烏頭がどこにいったのかは分からない。

「卷三五五 鬼三十五」は、巻の全ての説話が『太平広記』編纂者の一人である徐鉉の『稽神録』から採録されたものであり、「卷三三三二の江南、「卷三五四」の蜀に続いて、この巻では福建の説話が数多く収録されている。そして『太平広記』鬼部の掉尾を飾るのが「劉騰」である。この話の主人公烏頭は、乱世の中で人として一家離散、夭折を経験し、十七から六十二歳に至るまでは鬼として現世に留まり続けた。顕徳五年（958）に数え年で六十二歳の烏頭は、唐の昭宗の乾寧四年（897）に生まれたことになる。唐の滅亡のちょうど十年前である。鬼となった十七歳は後梁の末帝の乾化三年（913）、五代最初の王朝である後梁の末期である。つまり烏頭は唐に生まれ、後梁・後唐・後晋・後漢・後周の五つの王朝の交代期をその支配外の中国南部の国家で過ごし、後周が南部の最大勢力である南唐を屈服させたのを境に消息を断つたということになる。唐宋以来の長い混乱を経て後周の後継王朝である宋が中国南部をも版図に含む大帝國を築くことを暗示した説話を末尾に配したわけである。

塚墓宿泊譚

「潘襲」と「王攀」は、両話とも奥方が屋敷を取り仕切っている。これは、まだ夫が死んでいないことを示している。

変鬼帰還譚

「僧珉楚」に見える「掠刺鬼」は、五代十国期、最も繁栄していた経

済都市である揚州らしい鬼であると言える。

「胡澄」は、貧者が幽霊となっても債務に苦しむ姿を描く。胡澄が仏門に入ったのは、仏教が現世の理を超えた彼岸への済度を説く故であろう。

「劉騰」において、烏頭の二人目の夫の羅が仕えた晋王とは、即位前の後周世宗、郭榮（柴榮）のことであろう。郭榮が晋王に封じられたのは広順三年（935）のことである。

冥界召喚譚

「楊副使」は楊副使が冥官として召喚されたことを示唆する内容なので、冥界召喚譚に分類した。

「浦城人」の舞台である浦城は、十国の一つである閩（909～945）の支配領域であった。閩は南唐に滅ぼされた。

鬼神遭遇譚

「広陵買人」の説話としての成立背景には揚州商人の活発な経済活動がある。

「劉道士」は葬儀を行えないことの惨めさを強調する説話である。出現した鬼は、子供を悼む祖先の霊か、あるいは遺体を奪う怪物か、不明である。

「王訓妻」は、償債譚に属する説話であるが、多くの償債譚が畜生に転生してのものであるのに対して、鬼となつて償債する点に特色がある。「林昌業」は、素朴な山人との交流譚のような説話であるが、主人公が相手を鬼と解釈しているので鬼話に分類されている。

「鄭守澄」の怪事の起きた甲寅の年（954）の春は、南唐を服従させることになる後周世宗が即位した時期と一致する。

凶宅鬧鬼譚

「陳守規」は、霊とのドライな共生が描かれている、ユーモラスとも

言える話である。

「清源都將」の主人公は部将とあるので、南唐時代に置かれていた清源軍節度使の将であると考えられる。

まとめ

「鬼三十六」から「鬼四十」は、唐末から五代最後の王朝である後周までの時期の説話を排列している。しかし、五代十国期に関しては、数話の後梁・後唐関連説話を除けば、五王朝についての説話はほとんど無く、専ら南方・西方の諸国の説話を収録している。五代は興亡を繰り返しつつも宋という統一王朝に至る系譜である。それに対して後に十国と称される北方・西方・南方の諸国は皆滅亡した。滅亡に至つた唐朝と諸国において鬼がどのように跳梁跋扈したかを示すことが、鬼部末尾の諸巻の編纂コンセプトであつたと言えよう。

注

- (1) 『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第21号（2015）
- (2) 『日本女子大学紀要人間社会学部』第26号（2016）
- (3) 『日本女子大学紀要人間社会学部』第27号（2017）
- (4) 『日本女子大学紀要人間社会学部』第28号（2018）
- (5) 『日本女子大学紀要人間社会学部』第31号（2021）
- (6) 『日本女子大学紀要人間社会学部』第32号（2022）
- (7) 『太平広記』本文については、汪紹楹校点『太平広記』（中華書局 1961）に拠つた。また各説話の解釈においては、木村秀海監修・堤保仁編『訳注 太平廣記鬼部四』（やまと崑崙企画 二〇一〇）を参考とした。

The ghost stories of “Taiping Guangji” vol.36~vol.40

MITTA Akihiro

[**Abstract**] “Taiping Guangji (Extensive Records of the Taiping Era) “ is a collection of stories compiled under the editorship of Li Fang, first published in 978. The book is divided into 500 volumes and 40 volumes of them are ghost story parts. In this paper, I have analyzed vol.36 ~ vol.40 of the ghost story parts. The results of the analysis, I have cleared ideological features and features on the story type of Tang dynasty early ghost stories.